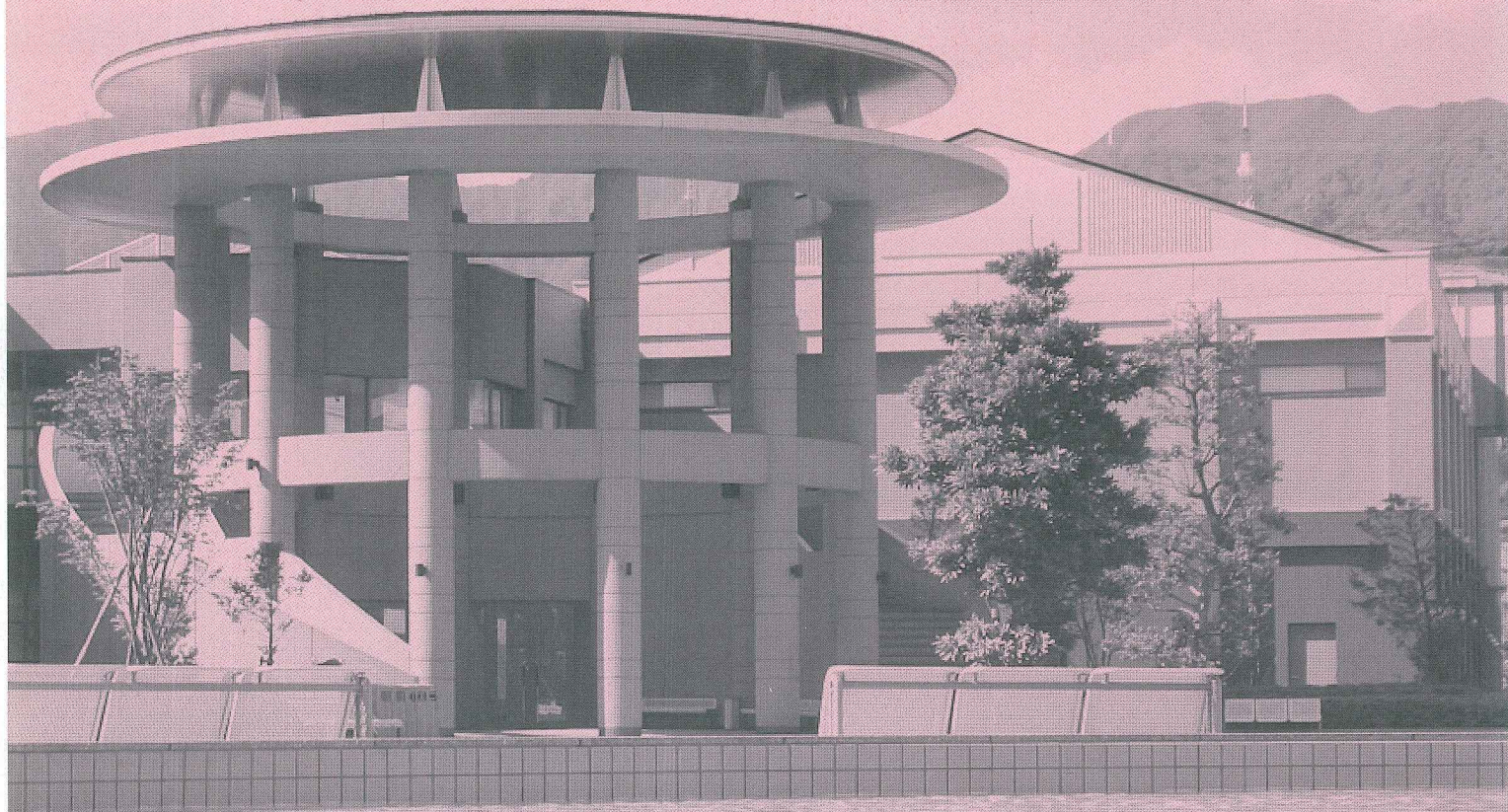


APU

立命館アジア太平洋大学

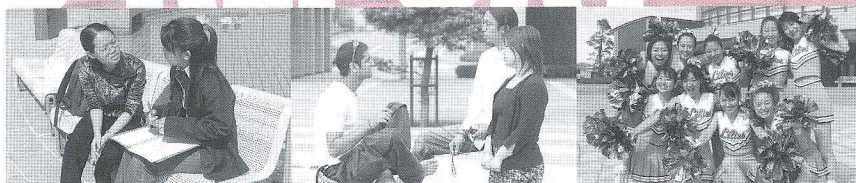


Ritsumeikan Asia Pacific University

PROGRESS REPORT

立命館アジア太平洋大学 プロGRESS・レポート
[2004年・春号]

特集：APUの国際交流事業の新展開
APU学生採用企業からのメッセージ



Spring 2004

Vol. 21

巻頭言

中華人民共和国駐日本国特命全権大使

武 大偉



WU Dawei

アジアは人口が多く資源が豊かであり、また歴史が長く文化は広博で奥深いものがあります。21世紀に入って、アジアの発展は新しい歴史的な好機を迎えています。全体として平和な国際環境はアジアの発展に有利な外部環境となっています。経済のグローバル化の更なる発展と科学技術の飛躍的な進歩は、国際市場を開発するアジア諸国にとって、国際資本と先端技術の導入を通して自国の経済を発展させる、きわめて有利な条件となっています。

アジアは新たな挑戦に直面しています。特に伝統的な、また非伝統的な安全に関する問題が相互交錯し、安全をめぐる情勢は複雑に錯綜しており、新しい国際政治・経済の秩序がいまだに確立できていないことあります。また世界経済の蘇りは緩やかで遅く、アジア経済にも解決すべき課題がきわめて多く存在しています。

国や地域間の協力を強化し、その発展を促進して共に利益を得ることは、アジアが奮起し振興する上で必ず通らなければならない道であるだけでなく、アジアにおける人民の根本的な利益でもあります。新たな好機と挑戦に直面しているアジア諸国は、この地域の実情と時代の潮流に相応しい戦略的選択を行わなければなりません。平和と安定を守ることはアジアが共生して共に利益を得る根本的な前提であります。発展と繁栄を促進することはその重要な基礎であります。地域における協力と交流を強化することはアジアが繁栄していくための有効な方法であり、また世界に向って開放、協力を堅持することはそのために欠くべからざる希望であります。

中日両国はアジアにおいて重要な影響力を持つ国家として、両国間の協調と協力を強化しアジア発展の大計について積極的に討議し、地域の繁栄と発展を促進するために、あるべき役割を果たすことは、私たちが21世紀に取り組むべき大事業であります。

立命館アジア太平洋大学は、斬新な教学の理念と独自の大学改革の方針を堅持しており、全学の教員と学生の半分が世界の60余の国と地域から構成されているという、名実伴う国際的大学であります。APUのアドバイザー・コミッティとして、私はAPUを創始された皆様の先を見通した高い見識に対し敬服の意を表しますと同時に、APUが開学して以来の順調なご発展を心から嬉しく思います。今後、APUがなお一層発展され、アジアの共同繁栄と発展のために新たな貢献がなされることを期待し、また信じております。

社団法人日本経済団体連合会 会長

奥田 碩



OKUDA Hiroshi

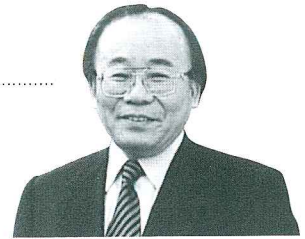
アジア・太平洋地域の将来を担う人材育成を目標とする立命館アジア太平洋大学（APU）は、今年で創立から4年目を迎え、いよいよ第1期の学生達が社会へと巣立っていきます。アドバイザー・コミッティ委員の一人として、本学をここまで育ててこられた関係者の皆様のご尽力に敬意を表したいと思います。

同時に、これからは正念場であると感じております。企業はその提供する商品やサービスの質により社会から評価を受けますが、大学の評価はその送り出す学生の質と彼らの社会への貢献にかかっており、弛まないうえに努力が求められます。

さて、21世紀の社会・経済を発展させるエンジンは、さまざまな能力とバックグラウンドを持つ個人、企業の「多様な価値観が生むダイナミズムと創造」であると私は考えます。私が会長をしています日本経済団体連合会では、昨年1月に「活力と魅力溢れる日本をめざして」と題するビジョンを発表しています。その基本的な考え方の一つとして、日本が再び活力を取り戻し、いきいきとした国となるためには、多様性の容認という視点が必要であり、日本社会の扉をより多様な外国人に開く必要があるということを目指してまいりました。また、アジアの多様性が生み出すダイナミズムを今後の成長の源泉とするためにも、日本は更なる開国を進めながら、「東アジア自由経済圏」構想を実現していくべきであると考えます。

世界67カ国・地域からの国際学生が集うAPUの学生達は、まさしくこの多様性の環境の中で切磋琢磨した貴重な経験を持ち、私達のビジョンを実現してくれる21世紀型の人材です。大分という日本の一地方から、わが国や太平洋・アジア地域の将来を切り拓く人材が輩出されれば素晴らしいと思います。卒業生の皆様には、APUでの勉学、経験、交流を生かし、グローバルな視野を持って活躍されることを期待します。

ごあいさつ



SAKAMOTO Kazuichi

立命館アジア太平洋大学長 坂本 和 一

新年にあたり、ひとことごあいさつ申し上げます。

立命館アジア太平洋大学（APU）は、アドバイザー・コミッティの皆様方をはじめ、国内外の各界の広範な方々の多大なご支援のお陰で順調に前進して参りました。この間APUは、8回の入学式を執り行い、毎回国内外の各地から優秀な入学者を迎えることができました。現在本学には、世界67カ国・地域から1,629名の国際学生が在籍し、2,128名の国内学生と切磋琢磨しながら勉学に励んでおります。そしていよいよ本年3月には、本格的に最初の卒業生を社会に送り出すことが出来るところに参りました。この間のアドバイザー・コミッティの皆様方のご支援に改めて厚くお礼申し上げます。

今、日本の大学には「国際的通用力、国際的信頼性の高い大学」づくりと「学生がよく勉強する大学」づくりが求められております。APUは、日本ではこれまでに例をみない多文化、多国籍の教育・研究環境を十分生かして、日本の大学教育の国際化の最先端を切り拓き、このような課題に応える信頼性の高い大学づくりに努めてまいりました。このような私どもの努力が認められ、昨年は本学の「多言語環境における日英二言語教育システム」が、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（COL）」の一つに採択されました。これは、この4年間、かつて日本では試みられなかった本格的な国際大学の創造を目指して努力して参りました大学関係者と、日頃多大のご支援をいただいております方々に、大きな励ましを与えて下さるものでした。

完成年度を迎えた昨年1年間の最大の課題は、いうまでもなく卒業予定者の最初の本格的な就職開拓活動でした。これに備えますため、本学は、アドバイザー・コミッティ委員の皆様のご協力をいただき、2001年秋には、「企業各位と大学・学生との懇談会」を、東京、大阪、福岡で開催

させていただきました。さらに2002年秋には各社人事ご担当の皆様を直接APUキャンパスにお招きして学生たちにご教示をいただく「ようこそAPUへ」企画をもたせていただきました。

このような2年間にわたる企業各社様のご協力のお陰を持ちまして、本学の学生たちは大いに啓発され、元気に就職活動に取り組むことができました。そして、国内学生も国際学生たちも、幾多の日本の伝統校にも優るとも劣らない内定を頂くことができました。特に国際学生は日本企業就職希望者が全員内定をいただくという、日本のどの大学にもみられない成果を上げることができました。昨今の厳しい就職状況の中、本学の卒業予定者が最初の社会への出発にもかかわらず、このような評価をいただきましたことは、これからの大学づくりにとりまして、この上ない励みでございます。一年目の成果におごることなく、着実に学生達の実力を向上させるべく努力してまいります。この度の就職活動に頂きましたアドバイザー・コミッティ委員の皆様のご支援に、改めて深く感謝申し上げます。

APUは昨年、2つの学部に加えて、2つの大学院、アジア太平洋研究科と経営管理研究科をスタートさせました。これらの大学院も、お陰様で順調に歩み出しております。

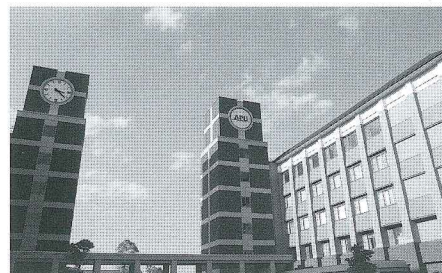
APUは本年よりさらに新しいラウンドに入っております。「APUネクスト・チャレンジ」と銘うち、さらに2010年のAPUをめざして、様々な新展開を図って参ります。

本学の活動場面もいよいよ多面化してまいります。日本ではじめての本格的な国際大学創造のため、大学関係者は、一層の努力を重ねてまいり所存でございます。

これまでのご支援に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご教示、ご支援賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(COL)」 に採択されました

文部科学省が採択した「特色ある大学教育支援プログラム(COL)」に、この度APUが選定されました。このCOLには全国で664件の応募があり、そのうち80件が採択されましたが、APUは「多言語環境における日英二言語教育システム」で申請し、九州の4年生私立大学では唯一採択されました。



COLは、大学教育の活性化を促進させる取組みのうち、特色のある優れたものを選定し、選定した事例を広く社会に情報提供することで、今後の高等教育の改善に活用し、高等教育の活性化を促進させることを目的としています。

APUの言語教育は、週4回の集中学習、到達度別科目編成、コンテンツ・ベース教育、付接モデルなどを軸に実施されています。また、基礎・専門教育科目は、英語と日本語で開講される科目がほぼ半数であり、全科目のうち約7割は両方の言語で開講されています。学生は、英語または日本語のいずれかで所定基準を満たせば入学できます。英語基準で入学した学生は、日本語の学習を行いつつ、英語で授業を受け、3回生以降は、英語でも日本語でも授業を受けます。こうした教育課程の設計により、多言語教育環境を生かし、言語教育と基礎・専門教育の連携によりAPUの理念を実現する学生を育成することになります。

今回の採択は、世界67カ国・地域から留学している国際学生の多文化・多言語環境を生かし、言語教育と基礎・専門教育を連携させた教育を行っているAPU独自の教育システムが評価されたものです。APUの理念に確信を持つとともに、完成年度を迎えた今、第二期に向けて新しい取組みを開始しなくてはなりません。今後ともAPUの教育の理念を実現していくためにも、皆様のご支援のほどよろしくお願いいたします。



[特集1] APUの国際交流事業の新展開

立命館アジア太平洋大学学長室室長・
教学部長

仲上 健一

67カ国・地域から1,600名を超す国際学生が国内学生と交わり醸し出す環境、APUはまさに国際舞台です。開学してから、この4年間で国際交流の段階から国際交流事業へと飛躍しつつあります。海外交換留学、国際交流に関わる学生の課外活動、大分県下の地域との連携も充実してきております。「学生が主人公」という大学本来の姿がキャンパスでも、地域でも、そして世界各地で活躍が展開されております。立命館学園は次の改革の軸として、「国際化第3段階」とおき、より大胆に国際交流事業を図るべく体制を強化しております。そして、そのフロントランナーであるAPUが、日本の中の「真の国際大学」として事業展開を行っています。

また国連機関、文部科学省、外務省、国際協力事業団、日本貿易振興会、国際協力銀行、日本政策投資銀行等との多様で組織的なネットワークが整備される中で、新しい事業が生まれ出しています。例えば、マレーシア日本技術大学設立委員として、本学の荒川宜三教授が選任され、新しい大学づくりの責任者として、重要な任務を担っておられます。また、国際協力事業団の中・東欧地域ビジネス人材育成プロジェクト支援委員会では、APUの5人の教員が委員（委員長：仲上健一）として就任し、「市場経済化」に必要な人材育成の具体化を行っています。更には、学生を軸とした事業として、NPO法人「APUグローバルビジネスネットワーク」(<http://www.apu.ac.jp/research/global-b/>) が設立され、APU国際学生のファミリー企業と九州の企業との共同事業を目的として地域産業活性化を図りつつあります。

従来の大学の国際交流は、研究・教育・文化交流、学生・教員交換に限定されておりましたが、それらの基盤を踏まえつつ、これまででは考えられなかった本格的な国際交流事業が始まろうとしています。また、APUならではの多角的国際交流、かつ学生の自発的な活動も進みつつあります。アドバイザー・コミッティの皆様方をはじめ、国内外の各界の広範な方々の暖かいご支援をお願い申し上げます。

APUの海外交換
留学プログラム

立命館学園（立命館アジア太平洋大学、立命館大学）では世界41カ国・地域の146大学・研究機関などと協定を締結しています（2003年10月現在）。APUはこのネットワークを活用し、交換留学や言語研修の実施、共同研究、学生や教員の交流など様々な形でパートナーシップを展開しています。

様々な国際交流の中、APUの教育プログラムとして提供している「交換留学プログラム」は、その重要性が高まるとともに、毎年派遣・受け入れ先の開拓に努めてきました。2003年10月現在、APUと学生交換プログラムを実施している協定大学は、世界17カ国・地域で33大学となりました。2001年のプログラム開始以来、総勢79名のAPU学生が、半年または1年間の交換留学生として派遣され、同時に協定大学の学生75名を半年、または1年間APUで受け入れてきました。

「交換留学プログラム」に参加したAPU学生達は、その派遣先で一緒に言葉の壁、異文化体験から来るストレス、母国を離れた地で求められる強い自立心など、幾つも

International Exchange

の課題を克服し、逞しく成長します。帰国後に飛躍的に高まった自己解決能力や積極性には、目を見張るものがあります。プログラム経験者から感じる国際交流のメリットは、「海外から母国を見ると、良い点・悪い点を実感できる」「派遣先での体験を通して、卒業後の進路を考える大きな材料を得た」「素晴らしい友人と出会い、海外各国にネットワークを作ることが出来た」などが挙げられます。勿論、渡航先では人間関係を含め、思わぬトラブルに遭遇することも多々ありますが、そういった問題と正面から向き合うことで、多くの事を学びとっています。

一方、海外協定大学から迎えた交換留学生は非常に高い問題意識を有しており、APU在学中の日本人学生に大いに議論を挑んでくれます。彼らからの指摘を受けて初めて日本の政治・経済・文化に対する関心を持ったという国内学生が少なからず存在します。互いに切磋琢磨する関係が確実に定着し始めました。

APUとしては、今後とも当該プログラムの一層の充実を目指し、各協定大学との連携を密にしながら本学学生への提供を続けて行く予定です。

交換留学生の声



日和佐 綾子
アジア太平洋学部4回生
日本

2003年の春セメスターにサモア国立大学の教育学部で学びました。サモアで海外交換留学をしたのは、卒業論文の為のフィールド調査を行いたいという目的と、APUとは違う世界・違う国に出ることで自分を鍛え、卒業後に青年海外協力隊や国際機関で働く為のステップアップとなる経験をしたかったためです。

サモア国立大学は、国唯一の高等教育機関であり、教育者もここで育てられます。一緒に学んだ同級生達には、実際に教師として教壇に立っている人もいて、現場の生の声を聞くことが出来ました。私の研究は「サモアの教育開発における海外援助の役割」というもので、まさに教育開発の進む真只中で学ぶことができ、又日本のODAの役割も目にしてきました。その点では国際協力事業団（JICA）の方に大変お世話になりました。

日常生活では、ホームステイをしていたため、サモア特有の価値観である「I」ではなく「We」という、人との繋がりの中で自分のアイデンティティが確立されるという価値観を体験し、また、机上で学んだアジア太平洋学地域で起こっている経済、社会、環境等の事象・問題を現実の世界で目にすることができ、サモアという国ならではの経験が出来たと思います。

Voice



ZAPATA Galvan Janett
アジア太平洋マネジメント学部
メキシコ

メキシコのモンテレー工科大学で、2年間マーケティングを勉強していました。アジアの主要国である日本には、文化面などに興味を持っていました。その中でAPUは、奨学金が充実しており、留学先を決定した一番の要因です。

APUには2003年9月にやってきました。APU学生はとてもフレンドリーです。また、世界の様々な国から学生が来ているので、メキシコでは知り合えない国の友達を作れます。せっかくAPUに来ているので、日本語を勉強しながら、たくさんの国の友人を作りたい、そのためには、自分から相手を受け入れる姿勢で接する必要があると思います。

メキシコにいる間に抱いていた日本のイメージと、実際に日本で目にしたものの違いも感じています。例えば着物。日本では日常的に、多くの女性が着ていると思っていました。私も浴衣を買ったので、クリスマスに着ようと思っていましたが、そのような習慣はないと言われ、がっかりしました。

APUではマーケティングの勉強以外に、社会学や環境学などアジア太平洋学の科目も受講しています。留学期間が終了したら、APUからアジアやヨーロッパに移動し、その国のマーケティング事情を調べてメキシコに戻りたいと思っています。

Voice

APU学生の 国際交流活動



■ PRENGO (プレngo) 一人と人とのつながりを求めて

プレngoとは

国境を越えた支援活動を継続的に行い、発展途上国における識字率の向上を目指しています。子供たちへの物資や教育支援を直接的に支援するサークル。NGOの前身 (PRE-NGO) が名前の由来。

PRENGO (プレngo) は「国際教育の支援」を主な柱として、2003年4月に活動を始めました。タイの小学校への文房具を支援するプロジェクトや、大分県内の小・中・高生への国際貢献・世界現状のレクチャーなどを行うほか、2週間に1度、タイに関するプレゼンテーションを行う研究会を開催するなど、「今出来ること」を考えながら32名で活動しています。

今年9月には、中津北高校の文化祭で、東南アジアで有名なチャーハン、ナシゴレンを売りました。その収益は、タイの子供たちへの支援金となります。また、文化祭に参加したことで、高校生に世界の現状に目をむけてもらうきっかけともなりました。

2003年12月に平松前大分県知事を招いてチャリティー講演会を行ったほか、2004年2月には、タイの小学校訪問・日系企業の工場視察といったフィールドワークも予定しています。

プレngoの活動の根本にあるのは「人と人とのつながり、人の気持ちが分かる国際人として、国境を越えた国際支援を行う」ことです。そのコンセプトを基に、大分にある紅葉寮という老人ホームを訪問しています。

日本の絵本をタイ語に翻訳して提供する「絵本プロジェクト」、文房具の提供、教育環境の整備を通して、より多くのタイの子供たちが学ぶ喜びを感じてもらえる活動を続けていきます。

■ サムルノリサークル —APUで韓国の伝統を再認識する

サムルノリサークルとは

韓国伝統打楽器の演奏をするサークル。

サムルノリサークルは、2003年の6月に発足しました。メンバーは韓国・日本、そして在日韓国人で、初心者が多いのですが、サムルノリをうまく演奏できるように、日々練習をしています。

これまでに参加したイベントは、APUの学園祭以外に、大分県内の竹田高校や別府湾サービスエリアでのイベント、また在日韓国人のウリ子ども会や福岡の小学校での演奏など、様々な場所で演奏活動を行っています。演奏を通して、多くの方に韓国の伝統的な音楽を知って頂く機会になりますし、メンバー自身も韓国文化を改めて認識する機会になっています。現在は、メンバー内の経験者と学外の指導者から演奏を教わりながら、技術を磨いているところです。

韓国の伝統芸能を伝えるサークルでありつつも、今後は日本で発展した在日韓国人の文化や、日本文化と融合したサムルノリの演奏も紹介できるような、韓国にはないAPUならではのサムルノリチームになりたいと考えています。

APUと地域との 国際交流



APUでは地域との国際交流を多彩に行っています。最近の事例として、2003年7月にAPUは鶴見町と友好交流協定を締結しました。「教育文化アドバイザー」として本学学生3名が任命され、町から毎月奨学金をいただくとともに、教育における国際交流を大きな柱として、小学校・中学校との交流事業を進めています。

鶴見町との友好交流協定締結後、8月に、APU国際学生が鶴見町の小学校・中学校を訪問し、国際理解に関する授業を行いました。続いて10月には、鶴見町の松浦小学校の5年生がAPUを訪問したほか、11月には鶴見中学校から全校生徒117名がAPUを訪問しました。小学生・中学生は、APU登録団体の「こここりあ」や「Ones' 1 Education Network」から国際理解に関する授業を受けたほか、国際学生によるキャンパス見学や懇談会を行いました。また、APUの文化祭や鶴見町の文化に相互に参加するなど、国際交流が深まる取組みを行っています。



アジア太平洋マネジメント学部
荒川 宜三教授

マレーシア日本技術大学（仮称）設立委員に荒川宜三教授就任

マレーシアで工学部と国際経営管理学部を併せ持つ「マレーシア日本技術大学」が、2004年6月より学生受け入れを始める予定です。この「マレーシア日本技術大学」を設立するための専門家として、APUアジア太平洋マネジメント学部の荒川宜三教授（前国際部長）が内定いたしました。

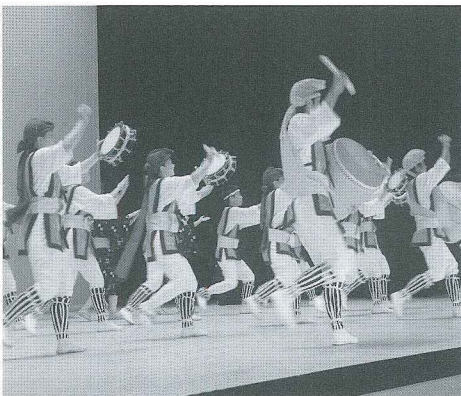
「マレーシア日本技術大学」は日本からの協力を得て、マレーシアとの共同事業として設置されたもので、最終的な学生数は5000名規模を目指しています。また、学生はマレーシアのみに限らず、ASEAN出身者が3割程度を占めることも目標としています。

この大学は、知日家の育成を日本とマレーシアの友好関係の中で実現することを目指しており、企業の第一線で活躍された方をはじめ、多くの日本人が教育に

携わる予定です。

就任にあたって荒川教授は、「この大学は、マレーシアのルック・イースト政策の総仕上げとして設立されるもので、日本政府の全面的な協力を期待しています。両国の教育制度の違い、文化の違いを乗り越えてASEAN諸国にも開かれた特色ある大学にするべく外務省、文部科学省、マレーシア高等教育局などと協力して鋭意準備を進めています。APUの私が選ばれたのは立命館学園の先進的な取り組みが評価されたことに他なりません。皆様のご支援をお願いいたします。」と抱負を述べられました。

「マレーシア日本技術大学」の名誉学長には、マハティール前首相が就任される予定です。



[特集2] APU学生採用企業からのメッセージ

世界中から
魅力的な人材が集まるAPUに
これからも注目していきたい

三洋電機 株式会社

人事ユニット要員・能力開発チーム マネージャー 岡本浩之

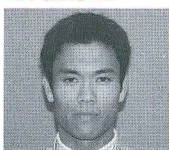


世界の人々から愛され信頼される企業であるために、当社では、国際的な経営基盤の強化、先進技術の開発、社会への貢献、優れたマーケティング、そして自立した従業員による積極経営を推進していくことを長期ビジョンとして掲げています。我々が求めるのは、こうしたビジョンを共に実行していける人材といえるでしょう。また、海外27か国・160か所の活動拠点において、地域社会と共存し、新しいビジネスを生み出していくことに貢献してもらいたいという期待もあります。しかし、そういった能力や資質を数回の面接だけで見出すのは困難なことです。そこで当社では、大学の休暇を利用した2~3か月にわたる長期インターンシップを実施し、実務に近い体験をしてもらい、適性や学生自身の意欲を判断しています。今年、APUからは5名の学生に参加してもらいましたが、その全員が絶対評価で「ぜひ欲しい人材」の基準をクリアし、採用内定につながりました。

APUの学生は、自立性という点において他大学の学生を圧倒するものがありました。自立性とは、自ら考え、結論を出し、その結論に最後まで責任を持つということ。加えて、オリジナリティあふれる発想で当社の新しい方向性を探っていける創造性も感じました。例えばインターンシップ中、香港、台湾をルーツに持つ学生に「中国ビジネス戦略」の立案を依頼したところ、独自の視点から中国のマーケットについて情報収集や分析を行い、論理性にも優れた内容を、自信を持って提出してくれました。インターネットを通じて情報が氾濫する今、表面的な知識は簡単に手に入りますが、それだけで満足しては、発想や行動の幅は広がりません。一方APUの学生は、生育環境だけでなく学びの動機や将来の目標が個性的かつ明確です。その人ならではの体験を豊富に持ってあり、それらをAPUの仲間とクロスオーバーさせるなかで自分なりの考えを育ててきているのです。来春、彼等が入社することで、社員間で日常的にも重要な局面でも価値観の違いがよい刺激となり、これまでになかった斬新なアイデアが生まれるのではないかと期待しています。

ここ数年の傾向として、当社の新卒採用に応募する学生の年齢層が22歳から20代半ばまで広がってきています。留学のための休学や大学院進学など理由はさまざまですが、当社だけでなく社会全体が自立性や創造性のある人材を求めており、学生側にも学び方を自分の意志で選択する姿勢が強まっていることのひとつの表れでしょう。その点でAPUには、主体的に学ぶための最先端の環境があり、「人と違う体験がしたい」という学生が集まっているのではないのでしょうか。我々にとってAPUは、国籍を問わず、日本も含め世界人口のなかから魅力的な人材を見つけるための窓口であり、これからも注目していきたいと思っています。

●内定学生

APM 4回生
(日本)
大山 高APM 4回生
(マレーシア)
RAMLEH, Camellia NurikramAPM 4回生
(ニュージーランド)
KO, Helen Chia-YiAPM 4回生
(イギリス・香港)
LAW Ching Shan RongdyAPS 4回生
(インド)
CHOWDHURY, Shradha

Special Report 2: Messages from Employers of APU Graduates

キャリアアップへの真摯な姿勢と 国際性豊かな校風で培われた 自由な発想力に期待します



株式会社 川島織物

人事総務部部长 橋本和基

当社の事業分野は帯や緞帳に代表される美術織物、住宅や店舗を彩るインテリアファブリックス、自動車・列車・航空機の内装材と大きく分けて3種です。近年、海外にも拠点を広げているのは自動車のシートファブリックの事業です。永年培ってきた織物技術を生かしていち早く自動車産業に関わってきた当社は、現在では国産車の3台に1台は川島のシートといわれるトップシェアを誇り、2002年には中国とアメリカに独資子会社を設立、特に中国ではシートメーカーで唯一独自工場を立ち上げています。これからは世界の自動車メーカーの多彩なニーズに対応するべくマーケティングを強化することが最大の課題と考えています。

海外進出という新たな一歩を踏み出した当社の次なる命題とは、創業160年の伝統を基軸としながら「川島ならでは」という独自の新しい強さを育てていくことにほかなりません。そのためにも人材面でも、語学力や国際性に加えて、過去の慣習にとらわれず自由な発想ができる人、いわば「朱に交わっても赤くならない」人をぜひ迎え入れたい。今年度の内定学生は、そういった当社の求める人材像に当てはまっていたと言えるでしょう。

APUの学生諸君は、学習や就職活動への真摯な姿勢が目立ちました。企業説明会でも他大学とは比較にならないほど次々と質問があり、そのなかでも内定された2名は群を抜いて熱心で、当社の事業内容、財務諸表や国内外の新聞記事なども調査の上で、自分なりの関心をぶつけてくれました。自己PR文や面接では、明確な目的意識を持ってAPUに入学し、主体的に学んだ成果として、世界を見るアンテナの鋭さ、リサーチ能力、プレゼンテーション能力などを備えていることを実感。Yinさんの場合は、日本人を超えているほどの漢字能力、流暢な日本語、高い論理性を持ちあわせておられました。また山本さんからは、サークル活動で文化や習慣が異なる多国籍メンバーの意見をまとめるのに苦労した、といったAPUならではの体験談も。どんな質問に対しても、この貴重な体験から得た自身の価値観で、自身の言葉で自由に述べられていました。また、じっくり人材を見極め、満足のいく採用活動ができたのは、各学生の履修状況、能力、希望進路、性格までを実によく把握しておられるキャリアオフィスが、職種へのマッチングやアドバイスを丁寧にされてきたからだと思います。学生を大切にされるAPUの真摯な姿勢がよく感じられました。

当社は存在感のあるファブリックメーカーとして全世界に認知されたいとの想いを込めて『feel good KAWASHIMA』というロゴを使用しています。『存在感のある』『全世界で認知されたい』という想いは当社だけのものではなく、事業内容の如何に関わらず企業すべて同様だと思います。そのためには短期的な利益の追求ではなく、ビジネスを通じて地域社会のみならず国際社会へ貢献していかなければなりません。この各企業の想いを実現するための大きな力となる人材が、APUという恵まれた土壌からますます巣立たれることを願っています。

●内定学生



APM 4年生
(中国)
YIN Hai Han



APS 4年生
(日本)
山本 祐美加

海外拠点の発展に不可欠な 国際的リーダーシップの 素質を感じました



住友電装 株式会社

管理本部人事部国際人事グループ担当課長 保田 勇

この度、当社では14名のAPU学生を採用内定としました。そのうち、5名は本社、2名は国内関係会社、そして7名は海外関係会社での現地採用です。来春卒業で就職を希望する国際学生の約1割にも相当する多くの学生を内定するに至ったのは、全員を採用したいと思うほど、学生一人ひとりに高い潜在力を感じたというのが大きな理由です。

我々は、自動車や各種電気製品の制御を担うワイヤーハーネスと呼ばれる電線を主に製造しており、世界シェアは12%で第3位、国内では第2位のシェアを占めています。より安全で快適な製品づくりに向けた、小型化、高性能化のニーズに応えるべく、国内に加え海外24か国62か所の関係会社と連携しながら技術開発や最適な製品供給に力を注いでおり、さらなるシェア拡大のため海外拠点を一層拡充していく方針にあります。特にアジア地域は現在の重要な生産基地ですが、将来的には研究・開発、設計、製品評価まで現地化される可能性も秘めています。しかし、いくらハード面で拠点を築いても、それだけでは意味がありません。海外拠点、ひいては当社の業務全体を発展させていくためには、現地の文化的、歴史的背景をふまえてリーダーシップを発揮し、生産や人事の管理・運営を円滑に行える人材こそが不可欠。その素質をAPUの学生に強く感じたのです。

私は今回、企業説明会や面接などでAPUの学生と直接コミュニケーションをとりましたが、どの方も、自分の国と世界の将来を担っていくんだという責任感と希望に満ちあふれ、輝いていました。彼等の持ち前の意欲がAPUでのびのびと発揮され、さらに大きなポテンシャルとなって実を結んだのでしょうか。例を挙げれば、日常会話のなかで各国の生きた情報を交換し合える、カフェテリアで世界各国の料理が味わえるなど、APUには、授業だけでなく日々の生活を通じて異文化間を自由に行き来できる恵まれた環境があると見受けました。そこで学んだ彼等であれば、高度な語学力や専門知識はもとより、自分のキャリアアップも含めた長期的な視野を持ち合わせながら、幹部候補となって活躍してくれるだろう、そのように確信しました。

言葉だけに終わらない真のグローバル化が求められる現代の企業にとって、APUは「人材の宝庫」と言っても過言ではないと思います。今後とも、国際学生、国内学生を問わず優秀な人材が輩出されていくことを大いに期待しています。

●内定学生



APS 4回生
 (韓国)
 KANG You-Hyun



APM 4回生
 (インド)
 GUPTA, Tushar



APM 4回生
 (中国)
 JIA Wei



APM 4回生
 (インド)
 BAHRI, Amit Kumar



APM 4回生
 (インド)
 SYED Mohammad Ali



APM 4回生
 (ミャンマー)
 Lin Myat Oo



APM 4回生
 (インド)
 UNIYAL, Sarita



APM 4回生
 (バングラデシュ)
 KHAN Muhammad Mazedur Rahman



APM 4回生
 (インドネシア)
 SANTOSO, Edy



APM 4回生
 (中国)
 QIU De Qiang



APM 4回生
 (インド)
 SINGH, Ritu



APM 4回生
 (マレーシア)
 HO Jhia Jiun

APUという多文化環境で 鍛えられたコミュニケーション力 を評価しています



滋賀銀行

人事部次長 奥 博

私とAPUの学生との最初の接点は、大阪で開催された「企業と大学・学生との懇談会」でした。その後APUキャンパスで開催された「ようこそAPUへ」という学生と企業との交流会にも参加し、徐々に校風を把握していくなかで気付いたことがあります。それは、こちらが黙っていても、常に学生たちの方から積極的に企業人に声をかけてくれることです。「ようこそAPUへ」の初日、「ノーベル化学賞受賞の田中耕一氏を企業はいかに評価すべきか」についてディスカッションする授業を見学したのですが、授業終了後、廊下に出たとたん私たちに数人の学生が「見学していただいた感想は?」「実社会ではどのように評価されるものなのですか?」と尋ねてきたのです。その積極性に好感を抱くと同時に、教室のなかだけで満足せず、現実の社会を意識して学んでいることをひしひしと感じました。また、キャンパスで記念写真を撮る私たちに、「撮りましょうか?」と気さくに声をかけてくれたことも、何気ないことですがうれしかった出来事です。今年の7月、当行の山田常務が特殊講義を担当させていただいた際にも、多くの学生が熱心に聴講してくれ、実社会への関心の高さを改めて認識しました。またこの時にも、学生たちはキャンパス内を歩く私たちに明るく声をかけてくれたのです。学生の約半数が外国籍というAPUには、考え方や価値観、年代が異なる相手と人間関係を築くチャンスが豊富にあり、そのなかで柔軟なコミュニケーション力と他人に対する思いやりの心が自然に身についているのだな、と実感しました。

我々の業務において、コミュニケーション力は営業活動における生命線であると言ってよいほど大切です。一人でも多くのお客様に満足していただくために、「お金を貸す」から「知恵と親切を提供する」という姿勢でお客様のニーズを把握し、「この人だからお願いしよう」と思っただけの真の信頼関係を築きたい。そして、「共存共学」を図るために、自分の考えをしっかりと話して、マニュアル（期待水準）を超えたサービスを提供したい。これは地域社会への貢献をめざす当行全体の願いです。当行は「ニュービジネス（野の花）」育成のため、おう盛な起業家精神をサポートするため「サタデー起業塾」の開催や無担保でもご融資する「野の花基金」等の新しい取り組み、「環境経営」や「地域福祉の向上を願う助成活動」も推進しています。こうした地域との連携においても、土台として一對一のコミュニケーションが重要であることは言うまでもありません。今回採用内定した4名の学生には、そういった能力の基礎が自然体で備わっており、実務を通じてさらに磨かれていくことと確信しています。私たちと共に、仕事を通じてお客様とロマンを共有し、感動を生み出していける日を心待ちにしています。

●内定学生



APM 4回生
(日本)
仲井 幸平



APM 4回生
(日本)
志村 智



APS 4回生
(日本)
宗形 洋平



APS 4回生
(日本)
吉田 麻琴

APUにとって「就職元年」である今年、「真の国際大学」を目指した教学、キャリア形成の成果が問われる重要な年でありました。2003年11月末現在、就職希望登録者の約85%が内定を頂いており、国際学生においては、有力な日本企業を中心に、就職希望登録者のほぼ100%が内定という期待以上の成果を収めています。これもひとえに、皆様の多大なご支援と、APU学生の特性を企業の皆様に評価して頂けたものと、確信しております。今後とも皆様のご支援を宜しくお願いいたします。

Report

有田焼の茶碗が贈呈される

ARITAWARE TEA BOWLS PRESENTED TO APU



9月29日、「特殊講義（茶道）」（鳥谷ポンパン先生）の授業で、有田焼の茶碗21碗の贈呈式が行われました。今回APUに



贈呈された茶碗は、立命館大学の卒業生で、有田の陶磁器会社株式会社キハラ代表取締役専務の木原長正氏と、株式会社原重製陶所代表取締役の原田重嗣氏より、贈呈されたものです。

贈呈式では坂本和一学長より、「木原氏・原田氏からAPU学生に日本の有田焼きを理解して欲しいとの意向で寄贈がありました。また、茶室「和心庵」は、裏千家の当時の御家元、千宗室氏（現在は千玄室氏）より、世界各国からきたAPU学生に、日本文化を知って欲しいと寄贈されたもので、APUを支援して下さる方々の意向に感謝し、茶碗や茶室を大切に扱ってください。」と挨拶がありました。

現在、「特殊講義 茶道」の授業は鳥谷ポンパン先生一人で講義を担当されていますが、大変な人気のある講座です。学生の履修機会を増やすためにも、2004年4月から新たに講師の先生が1名増える予定です。

Report

「APU-Club・国内学生父母の会」地域懇談会を開催

APU-CLUB DOMESTIC STUDENTS' PARENTS ASSOCIATION MEETING

2002年5月に発足した「APU-Club・国内学生父母の会」は、初めての地域懇談会を大分、福岡、東京および京都の各会場で開催しました。

このうち大分では10月13日、APUを会場に開催され、大分県出身学生の父母・保護者を中心に95名が出席しました。

全体会では、まず国内学生父母の会を代表して阿佐幸治副会長から、会の趣旨説明と協力を呼びかける挨拶があり、引き続き石川県一委員から2003年度事業の報告が行われました。

ひきつづき、坂本学長が大学を代表して挨拶をし、山神学生部長から学生生活の状況について説明がありました。

アメリカンファミリー生命保険会社に内定した菅 智穂さん（APM4回生、日本）から、自らの就職活動の体験報告があり、父母の方々は熱心に聞き入っていました。

全体会に続いて行われた回生別のグループ懇談会では、活発な意見交換が交わされました。また、閉会後の懇親会では、父



母と教職員が和やかな雰囲気の中、一層親睦を深めていました。

ひきつづき11月には福岡・東京・京都でも懇談会が行われ、福岡会場で50名、東京会場で54名、京都会場で85名の出席者がありました。

懇談会参加者からは、「大学の教育理念や熱意ある指導に、感銘を受けました」「就職体験談が息子との対話の参考になりました」「APUはユニークな、成長する大学であると思います」といった感想が聞かれました。

全日本大学女子駅伝対校選手権大会に出場

APU WOMEN'S ATHLETIC TEAM COMPETES IN ALL JAPAN INTERCOLLEGIATE WOMEN'S EKIDEN CHAMPIONSHIP

APUにとって、3年連続3度目となる「第21回全日本大学女子駅伝対校選手権大会」に、女子陸上競技部が出場しました。



9月に福岡で行われた、この大会の九州地区予選会「第11回九州学生ロードレース選手権」では1位となり、全国大会への切符を手に入れました。

全日本大学女子駅

伝対校選手権大会は、11月23日に大阪市の長居陸上競技場を発着点とする6区間39キロのコースで、25校が参加して行われました。今年もAPUから応援ツアーが生まれ、沿道にはAPUをはじめ立命館大学の在学生、OB、教職員が多数応援に駆け付け、声援を送りました。

成績は2時間19分28秒で、前年より48秒短縮したタイムとなり、3年連続で前年のタイムを上回り健闘しましたが、順位は昨年と同じ17位となりました。立命館大学は、2時間9分41秒で初優勝しました。

現在女子陸上競技部は、来年の選手権大会での飛躍を見据え、更なる練習に励んでいます。

第1回天空祭を開催

APU'S FIRST TENKU FESTIVAL



開学4年目を迎え、全回生が揃って初めてとなる学園祭「第1回天空祭」が、11月8日、9日の2日間にわたって行われました。また今回は、学生自らが日程調整から企画・実行の全てを手がけた初の学園祭となりました。

テーマは「史上最大のリトルワールド」。67の国・地域から国際学生が集まるAPUキャンパスを世界の縮図に見立てて、



APU学生が持つ様々な個性、知性を結集し表現したイベントが繰り広げられました。

会場内はテーマ別のゾーンに分けられ、この

うち「リトルワールドゾーン」では、APU学生の出身国が展示パネル等で紹介され、各国の伝統楽器を使って演奏される音楽やダンスを楽しむなど世界旅行気分が味わえるものでした。

サークルパフォーマンスが披露されたメインステージと各国料理の模擬店が立ち並ぶ「ラピュタゾーン」も賑わいを見せた他、「ミレニアムゾーン」(ミレニアムホール)では、モロッコで開催された青年会議に出席したAPSAIDのメンバーの報告会を始め、こここりあ主催の講演会など学術的なイベントも開催されました。

また今回の学園祭では、APUと交流活動を進めている大分県内の市・町(別府市、臼杵市、三重町、鶴見町)からも出店がありました。

両日で13,000名の方がAPUを訪れ、「天空」の世界を満喫しました。また、APU学生にとっても地域の方々との交流を楽しんだ2日間となりました。

Topics on APU

9月卒業式・入学式



9月19日（金）、APUを3年半で卒業する学生の卒業式が、コンベンションホールで行われ、約90名の教職員・在學生が参加しました。

今年3月に行われた卒業式に引き続き、APUでは2度目の卒業式となりました。今回卒業したのは2000年4月に入学した7名（国内学生6名、国際学生1名）で、早期卒業プログラム（3年または3年半で卒業に必要な単位を修得）に登録していた学生達です。

学生一人一人に、坂本和一学長から卒業証書が手渡された後、坂本学長から「卒業後も未知のものに挑戦する心を持ち続けて欲しい」とあいさつが述べられました。その後、卒業生代表として倉田野依（クラタ・ノエ）さんが「一期生として、一からAPUを作っていたが、後輩の皆さんも継続してAPUを作り続けて欲しい」とあいさつしました。今回卒業した7名は、企業への就職や大学院への進学など、それぞれの進路が確定しています。

式終了後、本部棟のラウンジで祝賀パーティーが開かれ、教職員や在學生が卒業生を囲んで和やかに門出を祝いました。

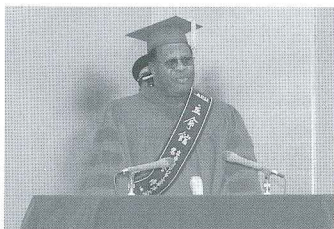
9月22日（月）、APUの入学式が、ミレニウムホールで行われ、新たにAPUに入学する学部国際学生208名と国内学生20名、大学院国際学生66名、国内学生4名が参加しました。式には、坂本和一学長・長田豊臣学校法人立命館総長を始め、石川公一大分県副知事・浜田博別府市長が出席され、ご挨拶頂いたほか、新入生の父母・教職員・在校生ら400名以上が出席しました。

在校生を代表して笠松裕史さん（学部APS4回生）、ヤブシャオ フェンさん（大学院 アジア太平洋研究科）が歓迎の挨拶をしました。また、新入生を代表して台湾出身のチンイ シュエンさん（APM）とメキシコ出身のカペロ ガルザカルロス アルベルトさん（大学院経営管理研究科）が挨拶しました。チンさんは「APUは日本にある小さな国連であり、国際的なコミュニティといえます。このキャンパスで得る知識・友達を大切にしていきたい」と挨拶しました。



マラウイ大統領に名誉博士号を贈呈

10月3日（金）午後、マラウイ大統領一行がAPUに来学されました。また、マラウイのパキリ・ムルジ大統領の業績に敬意を表し、APU名誉博士号を授与する贈呈式がAPU



コンベンションホールで行われました。

式には坂本和一学長を始め、APU教職員・学生らが参加しました。

式では、坂本学長から「マラウイやアフリカ諸国に経済的・社会的発展をもたらす努力をされ、世界平和のために貢献されたムルジ大統領に

敬意を表します」と挨拶がありました。続いて名誉博士号の贈呈が行われました。坂本学長より学位記が読み上げられ、あわせて「立命館アジア太平洋大学 名誉博士」と刺繍が入った肩章がムルジ大統領の肩に掛けられました。

ムルジ大統領から「博士号を頂き、坂本学長をはじめ先生方にお礼申し上げます。マラウイの今後の発展のためにも、日本とマラウイの友好関係を強めていきたい」と挨拶がありました。

最後に、マラウイ出身の本学学生カチガンバさんから花束が贈呈され、記念撮影が行われ和やかな雰囲気の中、贈呈式が終了しました。

文部科学省御手洗康事務次官が講演

10月11日（土）午後、文部科学省の御手洗康事務次官が来学され、国際公共経済学会・APU合同講演会で「転換点に立つ日本の大学政策と科学技術政策の動向」をテーマに講演を行いました。

この講演は、11日・12日にAPUで開催された国際公共経済学会の記念講演を、APUと共催で行ったもので、学会参加者・一般市民・APUの教職員や学生など130名以上が聴講しました。

講演会ではまず、APUの坂本和一学長、広瀬勝貞大分県知事、植草益国際公共経済学会会長からそれぞれ挨拶がありました。続いて御手洗事務次官の講演が行われました。御手洗事務次官は、現在の高等教育改革の全体像に触れ

つ、特に来年度の国立大学法人化に関わって、「日本の大学教育は大きな転換点に差し掛かっています。これからは、大学と社会の関係強化、大学間の競争、国際的な質の確保、この3点が大学運営の上で重要なテーマになるでしょう。」と話されました。



立命館校友有志による APU進路就職支援・新校友歓迎交流会

10月25～26日の両日、立命館東京校友会有志がAPUに來学し、進路就職支援会と交流会を開きました。会にはオートボックスセブン代表取締役CEOの住野公一東京校友会会長をはじめとする11名の校友、中野秀勝大分県校友会会長、竹本慎也APU校友会会長と大学役職者等が出席し、約100名の学生が参加しました。

竹本APU校友会会長の開会のあいさつで始まった会では、中野大分県校友会会長のあいさつに続き、「就職活動、われらは応援団一採る側はここを見る、新校友への期待」と題して住野東京校友会会長の講演が行われました。APU生2名の就職体験談と立命館大学校友会からの活動紹介の後、校

友を囲んで4つの分散会が行われました。学生からは社会人と学生の違いから、就職活動の心得まで、さまざまな質問がされました。

参加学生は「経験豊富な皆さんにとっても魅力を感じた。今まで就職に対して固苦しく考えていたが、勇気が出てきた」「OGOBに対する壁が低くなり、気軽に相談できるようになった」といった声が聞かれました。

校友と膝を交えて話をする機会を持ったことで、全国に広がる立命館大学校友23万人のネットワークの存在を力強く感じさせるイベントとなりました。



Topics on APU

臼杵市と友好交流協定を締結

2003年10月に、APUは臼杵市と友好交流協定を締結しました。APUの坂本和一学長・臼杵市の後藤國利市長、



立ち会い人として広瀬勝貞大分県知事・首藤新一臼杵市議会議長が県庁において同席し、調印式が行われました。

調印式では、APUの坂本学長から挨拶と協定の概要の説明があった後、調印が行われました。続いて広瀬大分県知事と後藤臼杵市長から挨拶があった後、記念撮影を行い、調印式が終了しました。

この度の臼杵市との交流協定締結は、臼杵市のまちづくりを大きなテーマとして、臼杵流スローライフや「臼杵学」の展開をめざして、様々な交流事業を行っていく予定です。さっそく11月1日2日には、APU学生27名が臼杵市の「日丸毛家屋敷」で、生活体験合宿に参加し、臼杵流スローライフを体験しました。

世界報道写真展 2003

10月29日より11月14日まで、APUコンベンションホールにて、「世界報道写真展2003」が行われました。

「世界報道写真展」は、オランダのアムステルダムに本部を置く世界報道写真財団が、前年の1年間に世界の報道写真家によって撮影された世界中のニュース写真を集め、コンテストを行い、その入選作品を展示するものです。写真展では、5万3千点余りの応募作品の中から、入選作品を中心に約200点を展示しました。(主催：朝日新聞社、世界報道写真財団、立命館アジア太平洋大学)

今回で46回目を迎えた2003年度のコンテストには、中国・瀋陽の日本総領事館に駆け込もうとする北朝鮮一家を写した写真が、日本人カメラマンとしては20年ぶりに入賞



し、話題を呼びました。また、世界報道写真大賞はエリック・グリゴリアン氏の「イラン地震で犠牲になった



父親が埋葬される墓のそばで、遺品のズボンを手にうずくまる少年」の写真が受賞しました。

この写真展は、日本全国5ヶ所を巡回して開催され、APUでの開催は2000年に続き、2度目の開催となりました。会期中、浜田博別府市長をはじめ、2,423名の方々が写真展を訪れました。入場者アンケートには、「どの写真も衝撃的で、その場の空気やにおいも伝わってくるようだ」「テレビのニュースを見るよりも実感が湧いた。写真には力がある」など、多くの感想が寄せられました。

立命館アジア太平洋大学 国・地域別の学生数

(2003年10月1日付)

2000年4月に開学したAPUは2003年に4年目を迎え、2003年9月の入学式でアジア太平洋学部・アジア太平洋マネジメント学部の両学部で、全ての学年・セメスター生が揃いました。

APUは開学当初より世界50カ国・地域から国際学生を集めることを目標に、アドバイザー・コミッティの皆様方のご支援をいただきながら、取組んできてまいりました。そして2003年には、67カ国・地域からの国際学生と国内学生合わせて3,757名（詳しくは下表をご覧ください）が集う「マルチカルチュラル・コミュニティ」と称するにふさわしい大学となりました。

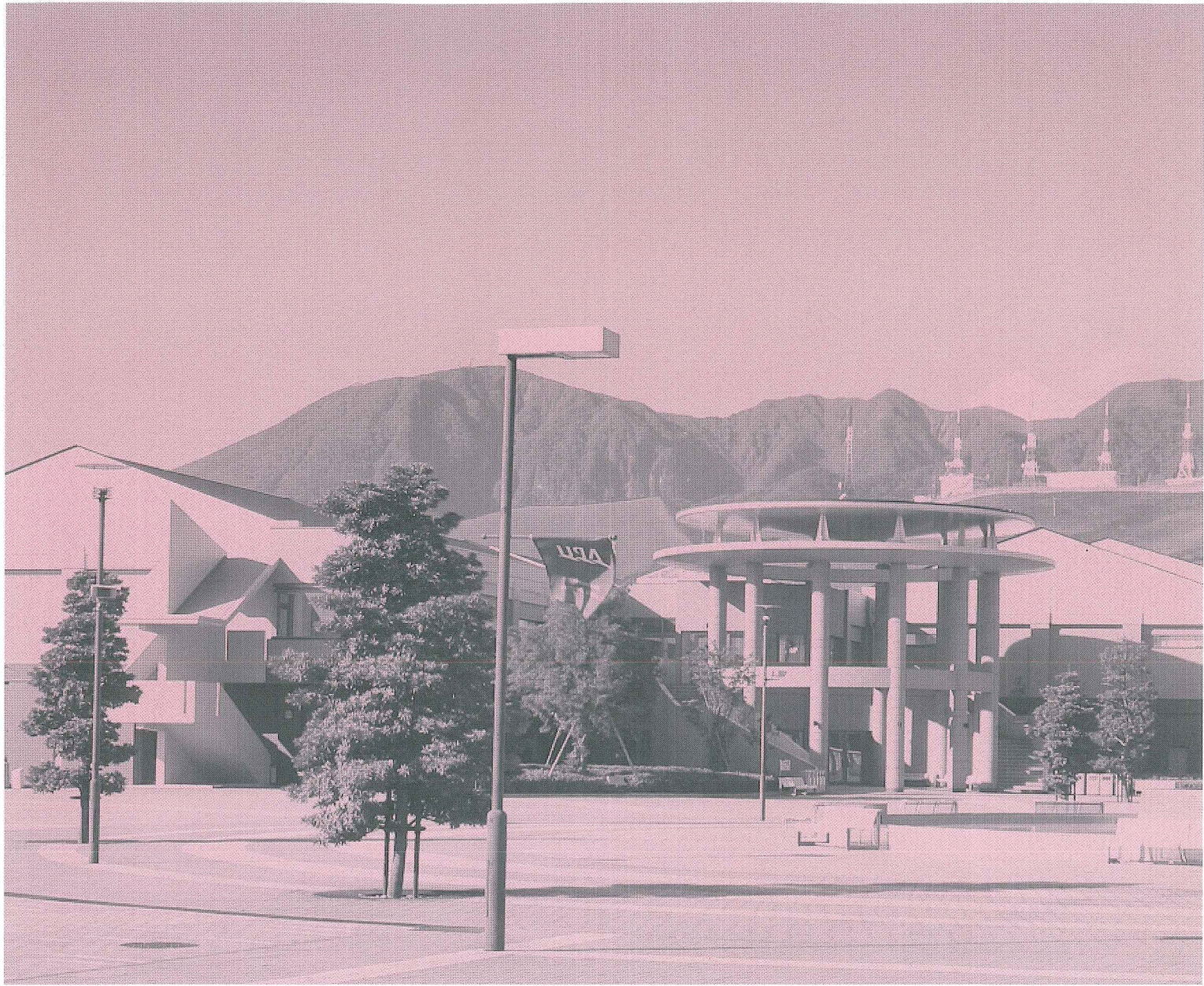
2004年3月には本格的に卒業生を社会に送り出しますが、今後ともAPUへ皆様方のご支援・ご鞭撻をくださいますよう、お願い申し上げます。



	国・地域	学部	大学院	学部・大学院合計
アジア	韓国	381	1	382
	中国	282	17	299
	台湾	147	2	149
	ベトナム	106	11	117
	インドネシア	97	4	101
	タイ	71	2	73
	インド	48	7	55
	スリランカ	50		50
	マレーシア	32	2	34
	フィリピン	20	1	21
	ネパール	16		16
	ラオス	14		14
	パキスタン	14	1	15
	バングラデシュ	12	3	15
	ミャンマー	11	6	17
	シンガポール	14		14
	モンゴル	13	3	16
	カンボジア	7		7
	ウズベキスタン	4		4
	イラン	2	1	3
ヨルダン	2		2	
グルジア	1		1	
シリア	1		1	
トルコ	1		1	
	小計	1346	61	74
アフリカ	ケニア	21	1	22
	ガーナ	12		12
	ウガンダ	8		8
	ナイジェリア	7		7
	エチオピア	4		4
	カメルーン	4		4
	マリ	3		3
	マラウイ	2		2
	ザンビア	2	1	3
	ジンバブエ	2		2
	スーダン	1	1	2
	コートジボワール	1		1
	ジブチ	1		1

	国・地域	学部	大学院	学部・大学院合計
	マダガスカル	1		1
	モロッコ	1		1
	エジプト	1		1
	小計	71	3	74
北・南アメリカ	アメリカ合衆国	31	3	34
	カナダ	10		10
	ボリビア	2		2
	エクアドル	2		2
	ペルー	1		1
	メキシコ	0	4	4
	小計	46	7	53
オセアニア	オーストラリア	14	1	15
	バブアニューギニア	8		8
	ニュージーランド	4		4
	サモア	4	1	5
	トンガ	1	1	2
	パラオ	1		1
	小計	32	3	35
ヨーロッパ	リトアニア	13		13
	ブルガリア	9	1	10
	ハンガリー	8		8
	イギリス	5		5
	エストニア	5		5
	ロシア連邦	4		4
	フィンランド	3		3
	ルーマニア	3		3
	ウクライナ	2		2
	ドイツ	2		2
	クロアチア	1		1
	チェコ	1		1
	オランダ	1		1
	スロバキア	1		1
ポーランド	0	1	1	
	小計	58	2	60
国際学生（留学生）合計		1553	76	1629
国内学生合計		2120	8	2128
APU学生総計		3673	84	3757

注) 国際学生とは、在留資格が「留学」である学生をいう。
国内学生には、在留資格が「留学」ではない在日外国人を含む。



APU 立命館アジア太平洋大学

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1 TEL.0977-78-1114 <http://www.apu.ac.jp/>